注

（1）『中国思想文化事典』（東京大学出版会、二〇〇一年）四六九頁。林氏はこれに先立って、「陰陽五行小識」（『人文科学』第三号、一九九八年）でも、ほぼ同様の定義を述べている。

（2）木村英一「五行思想の成立と其背景」（『支那学』第十号第一巻、一九四〇年）は、このような思考について、次のように述べる。

配當とは相異るものを互に對置結合する事であると云える。相異るものが互に對置結合される為には、相異るものが互に平行し對應するものとして考へられてゐなければならない。然るに種々のものを平行し對應するものとして考へるのは支那思想の一大特色である。

筆者も木村氏の見解に同意する。五行説の他に、例えば『釈名』などに見られるような、音韻の平行・対応によって概念の説明を図る思考も、その例に挙げられるであろう。なお、五行説に於いては、相異なるもの同士を並行・対応させようとするあまり、本来四種類しかない事柄であるのに、それを五行に当てはめようとして、分類を増やす例すら見出される。季節において「季夏」（「中央」「土用」とする説もある）を作り出して「土」に対応させようとしたのが、その代表的な例である。

（3）異説もある。後述。

（4）『漢書』巻二十七 中之上 五行志中之上。

（5）『白虎通義』情性。

（6）五臓・五性（五常）の五行への配当には、異説もあるが、『白虎通義』の中では、この配当で一貫している。

（7）梁啓超「陰陽五行説之来歴」（『古史辨』第五冊下、上海古籍出版社、一九八二年）。

（8）「五行、是中國人的思想律、是中國人對於宇宙系統的信仰。二千餘年來、它有極強固的勢力」顧頡剛「五徳終始説下的政治和歴史」（『古史辨』第五冊下、上海古籍出版社、一九八二年）。

（9）明代中期には王廷相が「五行辨」を著し、五行は本来は民生に供する物資の分類であったと主張し、更に後人がその五行をむやみに干支や五臓・星辰に割り当てたとして非難した（『明文海』巻一百十二 辨丙）。また、清代初期には、呉粛公「五行問」が、五行の相生・相克を秦漢の方術家たちによる捏造と断じた（『昭代叢書』甲集巻三）。

（10）陳独秀による『青年雑誌』創刊の辞「敬告青年」が、その代表格である。中国人の落伍の例として、「士不知科學、故襲陰陽家符瑞五行之説、惑世誣民」「醫不知科學、既不解人身之構造、復不事藥性之分析、菌毒傳染、更無聞焉、惟知附會五行生剋寒熱陰陽之説」と述べる（『青年雑誌』第一巻第一号、一九一五年）。

（11）『管子』五行「昔黄帝……（中略）……作立五行、以正天時」、『史記』巻二十六 暦書「太史公曰、神農以前尚矣。蓋黄帝考定星暦、建立五行、起消息、正閏餘」、『白虎通義』号「於是、伏羲仰觀象於天、俯察法於地、因夫婦、正五行」

（12）前出。

（13）前出。

（14）顧氏には、他に『秦漢的方士與儒生』という著作があり、更に広範に網羅している。ただし、これはテーマを陰陽五行説に限っておらず、また本人が「通俗小冊子」（「我是怎様編寫《古史辨》的」（『古史辨』第一冊、上海古籍出版社、一九八二年）、十頁）と述べているように、記述は非常に簡潔である。

（15）なお、顧氏の論文以前にも、飯島忠夫「宇宙生成論と太一陰陽五行」（『支那古代史論』、第一書房、一九二五年）や新城新蔵「干支五行説と顓頊暦」（『東洋天文学史研究』、弘文堂、一九二八年）が、五行説が五惑星の観測に発祥すると考える説を述べている。しかし、これらの推論には文献的論拠が不足し、かつ、五惑星の運行や占術が五行の相生・相克とどのような関係を有するかについての具体的な検討が欠けている。

（16）『師大月刊』第二十二期、一九三五年。

（17）木村英一「五行思想の成立と其背景」（前掲注参照）は、これら以外にも「火勝金」（昭公三十一年）、「水勝火」（哀公九年）を挙げ、次のように述べる。

一方において前述の如く五材・五物の如き思想があり、それが五行の前身であつたと思はれると同時に、他方に於いて木・火・土・金・水の五者全部の間の相生・相勝の如き循環關係が未だ考へられない以前に、此處に見る如き「水は火を消す」「火は金屬を鑠す」等の任意の二者間の相互作用關係が断片的に知られて居り、而もその或るものは

天體現象とも社會現象とも同一視さるる如き前論理的性格を帯びて居た、と想像しても少しも不自然ではない。後にも述べる如く鄒衍に至って始めて之を反省整理して五者相勝の關係を構成したのではなからうか。

（18）『甲骨学商史論叢』初集第二冊、斉魯大学国学研究所、一九四四年。

（19）赤塚忠著、赤塚忠著作集刊行会編『中国古代文化史（赤塚忠著作集第一巻）』（研文社、一九八八年）所収。

（20）四方風については、やはり胡厚宣氏が既に初歩的考察を行っている。甲骨資料「東方曰析」などを元にして、殷代に四方風が存在し、それぞれの名が『山海経』や『尚書』堯典にも見えることを論証している。胡厚宣「甲骨文四方風名考証」（『甲骨学商史論叢』初集第二冊、前掲）参照。

（21）時令・洪範・五材については、後述。

（22）『中国社会科学』一九八四年第三期。

（23）『中国古代宗教史研究――制度と思想』東海大学出版会、一九九八年。

（24）池田氏は出土資料の確実性について疑問を呈し、「成立過程の不鮮明な先秦古典に拠る他ない」と考える。

（25）その例として、『春秋左氏伝』昭公二十九年「夫物物有其官、官脩其方……(中略)……故有五行之官、是謂五官。實列受氏姓、封爲上公、祀爲貴神、社稷五祀、是尊是奉。木正曰句芒、火正曰祝融、金正曰蓐收、水正曰玄冥、土正曰后土」が挙げられる。

（26）金谷治「五行説の起源」・「陰陽五行説の成立」（『中国古代の自然観と人間観（金谷治中国思想論集 上巻）』、平河出版社、一九九七年）。

（27）林氏が思孟五行説の具体的内容と考えるのは、楚簡や帛書の『五行』である。その他、多くの学者も同じく『五行』を思孟五行説と考える。ただし、『五行』の内容を思孟学派の説と認定することに疑問を呈す考えもある。池田知久「『馬王堆漢帛書五行篇』の成書年代とその作者」（『馬王堆漢帛書五行篇研究』、汲古書院、一九九三年）を参照。

（28）林克「陰陽五行小識」、前出。

（29）劉楽賢氏は、陰陽五行説が鄒衍に発するという考え方は、出土文献資料によって既に誤りであることが証明されていると述べる。また、劉氏自身も、色・数字・干支の配当や相克といった重要な五行的言説が竹簡に見えることを論じている。「《日書》所反映的陰陽五行学説」（『睡虎地秦簡日書研究』、文津出版社、一九九四年）を参照。

（30）特に井上聰『古代中国陰陽五行の研究』（翰林書房、一九九六年）は、文献だけでなく、発掘の結果明らかとなった墓所の様式をも材料にして、大胆に五行説の形成・発展について推論している。

（31）『中国上代陰陽五行思想の研究』、講談社、一九五一年。

（32）『五行思想と礼記月令の研究』、汲古書院、一九七一年。

（33）李零「読幾種出土発現的選択類占書」（『中国方術続考』、東方出版社、二〇〇〇年）、同「読銀雀山漢簡《三十時》」（同書）、邢義田「月令与西漢政治」（『治国安邦――法制・行政与軍事』、中華書局、二〇一一年）。

（34）代表的なものとしては、安居香山氏による考察「劉漢関係緯書の五徳終始説」（安居香山・中村璋八『緯書の基礎的研究』、国書刊行会、一九七六年）・「感生帝説の展開と緯書思想」（『緯書の成立とその展開』、国書刊行会、一九七九年）が挙げられる。また、徐興無「論讖緯文献中的天道聖統」（『讖緯文献与漢代文化構建』、中華書局、二〇〇三年）や楊権『新五徳理論与両漢政治――「堯後火徳」説考論』（中華書局、二〇〇六年）も、様々な讖緯資料を用いて詳細な考察を行っている。

（35）山田慶児「医学の伝授」（『夜鳴く鳥』、岩波書店、一九九〇年）、同氏「九宮八風説と「風」の病因論」（『中国医学の起源』、岩波書店、一九九九年）、林克『『黄帝内経』における陰陽説から陰陽五行説への変容」（『大東文化大学漢学会誌』第三十号、一九九一年）。